

『旧世界史A』，『旧世界史B』

問題作成部会の見解

『旧世界史A』

1 出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

- 歴史に関わる事象を多面的・多角的に考察する過程を重視する。用語などを含めた個別の事実等に関する知識のみならず，歴史的事象の意味や意義，特色や相互の関連等について，総合的に考察する力を求める。問題の作成に当たっては，事象に関する深い理解に基づいて，例えば，教科書等で扱われていない初見の資料であっても，そこから得られる情報と授業で学んだ知識を関連付ける問題，仮説を立て，資料に基づいて根拠を示したり，検証したりする問題や，歴史の展開を考察したり，時代や地域を超えて特定のテーマについて考察したりする問題などを含めて検討する。

2 各問題の出題意図，解答結果及び自己評価等

第1問は，世界史上に見られた様々な経済活動をテーマとした。Aでは，中世以降の北ヨーロッパの商業に関する教員と学生との会話を素材とし，グローバル化やグローバルヒストリーという歴史用語の概念について，世界史で学んできた知識と両者の会話から読み取った内容とを関連付けて考察する力を問うた。Bでは，オーストラリアの華僑を題材として，19～20世紀前半のオーストラリア，華僑の故郷である中国，オーストラリアと中国との相互関係について，本文から適切に情報を読み取り，歴史的事象の個別の知識のみならず，背景・原因・結果・影響等も含めた包括的理解を踏まえて考察する力を問うた。Cでは，ブラジル経済の歴史的発展について取り上げ，コーヒー生産と地域的経済機構を具体的な事例として，個別の知識のみならず，歴史的背景・原因・結果・影響等も含め，包括的に理解しているかを問うた。

第2問は，ヨーロッパ勢力の膨張とその影響をテーマとし，Aはスペイン人によるアメリカの征服，Bはヨーロッパ列強によるアフリカの植民地化，Cはロシアの東方進出について解答させる問題である。Aでは，スペイン人によるアメリカ征服に関する文章を素材とし，スペイン人がアメリカ征服を成功させた原因について，リード文と，世界史で学んできた知識とを関連付けて考察する力を問うた。Bでは，19世紀に作製されたアフリカ大陸の地図を素材として，図で示される内容と，アフリカにおける植民地化およびガーナ共和国の歴史について，本文や資料から必要な情報を読み取ったうえで，個別の知識のみならず，背景・原因・結果・影響等も含め，包括的に理解しているかを問うた。Cでは，ムラヴィヨフ＝アムールスキーの手紙を基にしたゼミの様子を取り上げ，近現代のロシアとアジアの関係について，本文や資料から必要な情報を読み取ったうえで，個別の知識のみならず，背景・原因・結果・影響等も含めた包括的理解力を問うた。

第3問は，世界史におけるグローバルな交流や枠組みの形成をテーマとした。Aでは，江戸時代に長崎のオランダ商館長が世界の状況を伝えるために幕府に提出した『風説書』を素材として，世界史上に見られたグローバルな交流について，世界史で学んできた知識と，資料から読み取った内容とを関連付けて考察する力を問うた。Bでは，20世紀における日英関係の歴史について，特に日英同盟に関する資料を素材とし，資料からの適切な情報の読み取りと，その情報を目的に応じてまとめることを通して，日英同盟の性質や役割等の変容を考察する力を問うた。

第4問は、歴史上見られた「移動」をテーマとした。Aでは、地球規模の気候変動が、中国やほかの諸地域の歴史に与えた影響に関する授業を場面として取り上げ、会話文から読み取った内容を世界史的な文脈に位置付け考察する力を問うた。Bでは、第二次世界大戦後の南アジアにおける動乱について触れた3つの資料を取り上げ、スリランカ内戦、カシミール紛争、バングラデシュ独立に関する資料から適切に情報を読み取り、地理的な知識も踏まえつつ、その現代史の展開に関する包括的理解を問うた。Cでは、20世紀後半以降の世界の難民の動向の変化を題材に、世界史で学んできた知識とグラフから読み取った内容とを関連付けて考察・説明する力を問うた。

3 ま と め

以上、問題作成部会として、各問の出題意図と自己評価を述べてきた。最後となった『旧世界史A』についての見解を述べておきたい。分量については、受験者が余裕をもって時間内に解くことができる適切なものであったと考える。難易度については、大学入学希望者の学力を測る上で適切であった。

出題のバランスについては、地域的には万遍なく取り上げるとともに、地域を超えた人々の移動など、『旧世界史A』の問題としてふさわしい出題ができたといえる。分野別においても、「政治史」偏重という従来の状況をいささかなりとも是正すべく、「社会経済史」から5題、「文化史」から2題を出題した。時代別に関しては、前近代からの出題9問と、前年度よりもこの方面の設問数を増やしたが、今年度も教科の特性をふまえて、近現代史を中心とする作問の方針に準拠したつもりである。

設問形式については、生徒・学生の主体的な学びの状況を具体的に想起させるような場面設定を積極的に取り入れた。これは、我々の作問意図が大学入学のための考查のみにとどまらないことを示したかったからである。受験者を実際に受け入れる側として、アカデミックな世界がどのようなものであるか、また、そこで学ぶのにどのような資質・心持ちが必要かについて、少しでも早く実感してほしいと願い、その機会を提供すべく作問に当たった。

『旧世界史A』の作問は今年度が最後となる。学習指導要領・教科書のテーマに即した作問に細心の注意を払ったことは言うまでもない。さまざまな指摘・意見を踏まえつつ、単純な知識問題に帰結することなく、基礎的な歴史知識を活かした歴史的思考に基づいて解答できるような、受験者の思考力・判断力・表現力等を測定しうる設問を考案できたと考える。

『旧世界史 B』

1 出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

- 歴史に関わる事象を多面的・多角的に考察する過程を重視する。用語などを含めた個別の事実等に関する知識のみならず，歴史的事象の意味や意義，特色や相互の関連等について，総合的に考察する力を求める。問題の作成に当たっては，事象に関する深い理解に基づいて，例えば，教科書等で扱われていない初見の資料であっても，そこから得られる情報と授業で学んだ知識を関連付ける問題，仮説を立て，資料に基づいて根拠を示したり，検証したりする問題や，歴史の展開を考察したり，時代や地域を超えて特定のテーマについて考察したりする問題などを含めて検討する。

2 各問題の出題意図，解答結果及び自己評価等

第1問は，「人・モノの移動や技術の伝播」をテーマとした。Aでは，西アジアにおけるカーナートの伝播に関する地図を素材とし，西アジアの歴史と，技術伝播やモノの移動について，既習知識と地図，リード文などと関連付けて考察する力を問うた。特に，問3は，イスラーム世界からヨーロッパにもたらされたモノの歴史についての既習知識に加えて，リード文と地図の読み取りから判断する思考力・判断力・表現力等を問う問題である。Bでは，『エリュトゥラー海案内記』を素材に，海路を用いた古代の東西交易のあり様について問うた。Cでは，7～8世紀におけるイラン系ソグド人の活動と，当該期における中央・東アジアの政治状況の変化との関連性について，背景・原因・結果・影響等も含め，包括的に理解しているか問うた。特に，問9では，複数の歴史的事象の比較などして得た類似・差異等に着目して，特徴を考察する力を問うた。

第2問は，「世界史上の都市の特徴」をテーマとし，Aは港市国家チャンパー，Bはチェコ人労働者の集まるウィーン，Cは水問題からみた香港について，その特徴を解答させる問題である。Aでは，港市国家という概念の具体例としてチャンパーを取り上げた。チャンパーの特徴がその立地条件によってもたらされたものであることを，合理的に理解する思考力を測った。Bでは，ウィーンの労働者を題材として，西洋の近代化と労働運動，及び中欧地域の歴史的経緯の知識と，資料及び会話文の内容とを関連付けて考察する力を問うた。Cでは，近現代の香港を取り上げ，戦後香港の人口増と関わる国共内戦，香港の統治をめぐるイギリスと中国の関係，中国大陆との経済面の関係，香港の通貨制度について，包括的理解を踏まえて考察する力を問うた。

第3問は，絵画や文学に関する解釈をテーマとした。Aは『レパント戦闘図屏風』，Bは小説『ドラキュラ』を題材とし，異なる解釈や歴史評価の多様性について考えさせる問題とした。Aでは，17世紀初頭に制作された屏風について，既習知識と屏風から読み取った内容とを関連付けて考察する力を問うた。日本を中心としたアジアの対外関係，フェリペ2世の事績について問うた。特に，問3では，この絵の場面がレパントの海戦だとする従来の説を批判的に検討させる問題とした。Bでは，小説『ドラキュラ』を素材として，前近代以降の世界史上の出来事の知識と，会話文の内容とを関連付けて考察する力を問うた。特に，問6では，20世紀転換期のイギリス社会について，会話文から読み取った情報と既習知識とを論理的に接合しながら仮説を導き出す点で，思考力を問うた。

第4問は，「国際関係を変化させた国内政治や外交政策の転換」をテーマとし，Aでは，パナマ運河の返還を取り上げ，アメリカ合衆国の影響下に置かれた，パナマの自立と主権回復について考えさせることを目的とした。特に，問3は，既習知識とリード文の読み解きを組み合わせ，

運河地帯の主権回復がパナマ人にとって「独立」に相当する重要性をもったことについて説明している。B では、江華島事件に関する地図を題材として、朝鮮を軸に東アジア地域の国際秩序のあり様をテーマとした。特に、問 4 は、16 世紀における朝鮮を中心とした東アジア地域の戦乱や交流について、既習の個別知識にとどまらず、その背景・原因・結果・影響等も含め、包括的に理解しているかを問うた。C では、アメリカ合衆国の兵員数を題材とし、軍隊の兵員数の増減と、既習知識とグラフやリード文の内容とを関連付けて考察する力を問うた。アメリカ合衆国の兵員数の増減を示すグラフを取り上げ、アメリカ合衆国の外交や安全保障政策との関連性について考察させた。

3 ま と め

以上、問題作成部会として、各問の出題意図と自己評価を述べてきた。今年度で最後となった『旧世界史 B』についての見解を述べておきたい。

分量については、試験時間に見合った適切なものであったと考える。

出題のバランスについては、全 33 問中、「西欧・南欧」が 14 問、「東アジア」が 8 問、「東欧・ロシア」および「アフリカ」がそれぞれ 3 問、「国際」が 2 問、「アメリカ」、「東南アジア」、「西・内陸アジア」からそれぞれ 1 問を出題するなど地域と時代のバランスに留意した。時代別では、前近代 14 問、近現代 19 問と、後者に比重を置く出題となった。

資料・グラフ等については、「資料やデータ等を基に考察する」ことを重視しつつ、地図・グラフ・写真・文章資料など多様な歴史資料を提示することに努めた。また、資料読解に基づく考察や内容の理解を伴う包括的知識を問おうとする作問にも努めた。あわせて、受験者が解答することによって新たな歴史像・歴史認識を獲得できるような設問も、積極的に作成した。

『旧世界史 B』の作問は今年度が最後となる。学習指導要領・教科書のテーマに即した作問に細心の注意を払ったことは言うまでもないが、さまざまな指摘・意見を踏まえつつ、単純な知識問題に帰結することなく、基礎的な歴史知識を活かした歴史的思考に基づいて解答できるような、受験者の思考力・判断力・表現力等を測定しうる問題を作成できたのではないかと考える。